

未来方程式

—fate equation—

shinseiki
神世希

Illustration
mebae

KODANSHA
BOX
POWERS
BOX

equation—

程式

未来

—fate

方

愚かなニンゲンに対する法の呪文

この詞を読むであろう方々よ とくと熟考なさい

俗人 門外漢 無知な者に近づいてはならない

科学者 愚者 野蛮人は遠ざかってなさい

さもなくば儀式に従って呪われるがよい

■ Prologue

：

フードの奥に顔は無かった。

其処には見た者を吸い込むような●があるだけ。
光さえ無に帰すブラックホール。

この世を呪わんとする——暗い、冥い闇。

問われた少女はその●に意識を呑まれ、言葉を奪われ、ただただ恐怖に震えていた。

季節は夏を迎えようというのに、此処は真冬のよ
うに寒い。

身体が、心が凍るような思い——

「今一度問う——汝は預言者か？」

響いた声音は地獄からの呼び声だった。

答えなければ殺される。頷かなければ生きられない。

肯定しなければ明日はない——少女は本能で
そう悟り、地獄の淵から這い出るよう、喉を嚙らし
必死に叫んだ。

「そうです。私がヨゲンシヤです」

「……………」

その言葉に——影は沈黙する。

「全知全能たる我らが父、天上の神の代行者として
問う——汝は預言者か？」

全身を包む黒装束。

漆黒の夜闇を羽織ったその影は、脅えて泣きじや
くる少女を前にして、そう問い掛けた。

ガランドウの部屋。

高さ十数メートルはあろうかという天井。

その高所より夜空を覗く天窓から、一縷の月光が
零れ落ちる。

それは暗い部屋の中で唯一の、幽かな幽かな光。

黒く染まった大気は闇を固めたように凝り、其処
はまるで海の底、月明かりの映す深海の様。

物音を殺して蔓延る、霧のような深夜——

そんな夜に溶け込んだ黒い影が、床の上で這う少
女を見下ろしている。

にして、許されざる大罪の一つなり——」

漆黒に浮かぶ真白の手が、その間に一本の凶器を携え、ゆつくりと少女の首へと伸びる。

「神の名を謀るとは。……この魔女め」

死を以て償え

「非ッ、被い……嫌、イヤ——お願い、止めて。

イヤ、いやああああうぐッ——」

「……………」

白き死神の魔手は、音もなく生命を絞め——

Operation Lockvogel

《3658:23》

○都内某所

……ピッ、ピッ……ザァー……ザァー……

無線連絡受信中……

『——こちらファーン。現在目標後方二〇メートル付近で待機』

『本部了解』

『こちらペウルン。目標前方二五メートル、指定位置に到着』

『了解。ペウルンはその場で待機』

『こちらフェエダー。現在ポイントα6にて待機。』

目標周辺に不審人物ナシ』

『了解。各自状況最終確認。作戦目標は被疑者確保を最優先に。別命あるまで待機』

『了解』

陽の光を受けて聳える摩天楼。

乱立する高層建築。

大地を覆う高架の群れ。

地表を埋め尽くす交通網。

屋下がりの街並み、車の行き交うビルの谷間、通

行人の疎らな遊歩道……

舗装されたその道に、漆黒の長髪を風に靡かせ歩く、一人の見目麗しき女性の姿——

『ちよつと待つのだじゃ。被疑者確保を最優先にとは、拙者の身の安全は保証しかねる、ということか？』

『アザイン。作戦中の私語は慎みたまえ』

『そうッスよ、諏訪センパイ』

『お前は口を開くとボロが出る——口チャック！』

『諏訪ちゃん、お願いだから黙っててね』

『おのれおら……他人ごとだと思えばよって——』

『いいかね、諏訪巡査部長。——時に警察官たるもの、その身を犠牲にして市民の安全を守らねばな

らない』

『羽山サン。なんかそれカッコイイっスね。何かの格言みたいで』

『それって羽山刑事のモットーすか？』

『だからコードネームで呼び——』

『そうか？ たった今テキトーに思いついただけなんだが……』

『……胸中の不安が滲み出る諏訪巡査部長の沈黙』

その女性を遠巻きに見守る三つのヒト影。

一つは彼女の後方、電柱の陰に。

一つは彼女の前方、看板の背後に。

一つは彼女の上方、歩道橋の上に——

『フェーダーから作戦本部へ。目標はポイントβ4へ移動』

『本部了解。フェーダーはその場で引き続き監視を続行。ファーンは尾行を継続。ペウルンはポイント

γ2へ移動しろ』

『フェーダー了解』

『ファーン了解』

『ペウルン了解』

三つの人影に見張られた女性は、人通りのある街並みから、人気の無い路地へと進路をとる。

そこは高架を走る車の群れや、鉄道の騒音に耳を塞がれ、著しく視界も狭まる都会の獣道。

それは日中でも陽の当らない裏街道、事件の臭いが鼻につく暗黒街——

『こちらフェーダー、目標の様子を窺う不審な人物を発見』

『なにっ？！』

『ココからは見えないぞ』

『対象はビルの陰に上手く隠れています。——身長は一七〇センチ前後。服装は黒のワンピースにフ

リルの付いたエプロンドレス。頭にはカチューシャ。それから黒のニーソックスを着用……」

『オイ、そののいつたいドコが不審人物なんだ？』

『確かに目立つ格好ですけど——どっかの店のメイドさんじゃないんすか？』

『それくらい今どき珍しくもなんと——』

『いえ、ただ……』

『ただ？』

『その対象——太股絶対領域の裏側に“毛”が生えています』

『「……毛？」』

巨大なビル群の足元は暗い。

さらに周囲を高架に囲まれていたのでは尚更だ。

その白昼でもヒト目につき難い街中の路地は、善からぬことを考える者にとって、相手と接触する絶好の場所、恰好の餌場となる——

『なんじゃ？ 後ろの方から誰か近づいて来ておるのか？』

『ハイ……毛がぼぼーぼ、ぼーぼぼ——と』

『それは……聞くからにアヤシいな』

『ええ、太モモの裏側にモツさり』

『モツさり、か……』

『明らかに不審人物っすね、それ』

『おい、其奴は何者なんじゃ』

『諏訪は黙っている。作戦を潰す気か』

『本部より命令——アザインは口を開くな』

『五月蠅い！』

『ちよ……諏訪ちゃんはこつち振り向かないで。相手に気づかれる』

『時に警察官たる者、後ろを振り返ることなく前に進むべし』

『あ、ナンかそれカッコイっすね』

『そんなこと言っておる場合か！』

後方より接近するメイド服が、その前方を歩く胡桃色の美人に声を掛ける——

「……ねえ、ちよつとそこのアナタ——」

『ファーネは大至急ソイツに職質掛けて！ 抵抗するようなら公務執行妨害でしよつ引いてよし！』

『ファーネ了解』

『ど、どーするのじゃ。そ、某は……声を掛けられてしもうたぞ』

『……』

『……』

『こ、こうなつたらもう……振り返るからな』

『同業強姦唾を呑み込め泣き』
『ゴクリ』

「あー……そこのメイド服着たヒト。ちよつといいかな？」
(ファーネ 洵作)

「——は？ 何よ。アンタ誰？」

誹訪巡査部長が後ろを振り返ると——其処には
苔むした濃い青ヒゲがあった……

■ 1 / 1

《365933》

○アキバ署【取調室】

「名前は？」

「ジョセフィーヌ」

「年齢——」

「じゅーななさい♪」（オイオイ）

「しよくぎよう……」

「メ・イ・ド♡」

相手はしなを作り、小首を傾げて答えて来た……

現在——波多野洵作^{はたのじゆんざく}巡査は、口周りに濃い青

ヒゲを塗し、本来真っ白な更地であるハズの絶対領

域に「モツさり」と毛を生やした、どー見ても三〇

は越えている女装趣味のオッサンと、スチール机越

しに向かい合って座っていた。

「あのさあ……ちゃんとマジメに答えてくれる？」
洵作は心底ウンザリした声、嫌^{いや}そうな表情で言っ
た。

「答えてるじゃない、ちゃんと」

そう答えると、相手のメイド氏は頬を膨らませ、

唇を3^{とが}らせて抗議してくる。

「アンタどー見ても日本人だろ。トシ三〇は越えて

るだろ。その背恰好でメイドなんて無理あり過ぎだ

ろっ！」

洵作はそこでメイドに向かつて三連続でツッコミ、

同時に「盤ッ!!」と机を叩いて身を乗り出すと、精

一杯刑事の凄みを利かせて、目の前のメイド氏を睨^{にら}

みつけた。

「憤怒ぬぬぬぬっ！」

「むふふふふふっw」

「波多野洵作刑事の脅し」

VS.

「変態メイド氏の奇面^{はばえみ}」

鼻先が今にも触れ合うかという寸前、両者は一歩も譲らず顔を突き付け合うが、争う姿勢を見せているのは洵作だけで、それでは暖簾のれんに腕押しうで押し糠ぬかに釘くぎ。一向に相手からは相手にされていらない。まったく手応えナシ。

「憤怒ぬぬぬぬつ！」

「むふふふふふつw」

「憤怒ぬぬぬぬぬつ！」

「むふふふふふつw」

「憤怒ぬぬぬぬぬぬぬ……！」

「むふふふふふふふ……w」

……………

……………

……

「——ハア……なんだかねえ」

そうして先に脱力、根負けして折れたのは洵作の方。気合いを入れて凄んでみせたところで、変態メイド氏の奇面ほほえみを打ち崩すことは出来なかった。

洵作は気を取り直して尋問を再開する。

「名前は？」

「ジョセフィーヌ」

「源氏名じゃなくて本名の方」

ムツツリ押し黙るメイド氏

「……」

するとイイ歳とししたメイド氏は、スネたようにイジけた表情かすをして、一頻りひとしきゴネたポーズの後。

「……北山寅雄」

「本名は、どらお、つすか……」

「歳は？」

「さんじゅーに」

「MISOJI過ぎてるよ……」

「職業は？」

「だからそれはメ・イ・ド♡」

「雇われホステスね——いや、この場合はホスト

になるのか？」

洵作はもう相手の答えなど無視して調書に書き込

んでいく……

「ねえ、ちよつとお」

目の前で調書に書き込む洵作の姿を見つめて、北山寅雄（三三）は、オネエ系のカマ臭い声を上げた。

「ナニ？」

洵作は不審な、眉間のシワも鋭利に聞き返す。

「アナタね、よく見ると結構イイ男じゃなあ〜い。今度さあ、一度ウチの店に遊びに来なさいよお〜。

アタシのこと呼んでくれたらあ〜、トクベツにサあ

〜ビス価格にしてあ・げ・る♡」

「僕は行かないよ。そんな店」

洵作、即答す。

「ああ〜ら、さんねん。アタシ、フラれちゃったかしら？」

特に残念そうでもなく、あくまでおどけた調子で会話を続ける北山。

「それともアナタ——」

彼に名前を付けた両親は、まさか自分の息子が将来こんな“奇腐人”に化けるなどとは思いもせず、

“寅雄”という名前に、きつとトラのように逞しく

漢らしく、そんな大人に育つてほしいという願いを

込めていたのだから……子供は親の理想通りには育たない。その想いは寅雄が第二次性徴期を経てト

ランスフォームすると同時に脱皮後の抜け殻の如く

破棄された。正に親の心子知らず。

「あつ、ひよつとして……お客じゃなくてウチで働きたい方？」

「は？」

「いいわよいわよ。アタシもね、脱サラして今のお店に入ったのよ。最初はね、確かに会社に居た頃よりお給料も安くなるし、慣れないことばかりだから仕事もタイヘンだけど……それでも三カ月くらいすれば、仕事も覚えて少しはラクになるし、何よりとっても楽しいわよ。会社に勤めていた頃みたいに、上司や同僚の前で無理して自分を偽らなくていいし、ホントの自分ってゆーの？ それをね、こう、全部曝け出して——」

—— 洵作と寅雄のいる取調室の隣。

その部屋のマジックミラー越しに、二人の様子を見つめている四つのヒト影があった。

「アレ、全部曝け出したらマズいだろ」(羽山)

「そーっスね。絶対領域のちぢれ毛まで曝してしまつたら、迷惑防止条例違反。もうお天道様の下は歩けないっスよ」(遠藤)

「憤、迷惑防止条例違反など生温い。アレはもう公然猥褻罪、その場に立つておるだけで犯罪者じゃ。ヤツは既に存在そのモノからして罪じゃ」(諏訪)

「諏訪センパイ、それはいくらなんでも言い過ぎなんじゃ……」(遠藤)

「いや、諏訪クンの言う事も一理あるよ。こうして不審者として引つ張つて来たんだし」(係長)

「—— って言うか洵作のヤツ、なに相手にスカウトなんかされてんだよ。ちゃんと取り調べしろっつーの」(羽山)

「ハハハ、ほんとっスよね。センパイなにやってんだか」(遠藤)

「すつかり相手のペエスに吞まれておるな。あれでは刑事失格じゃ」(諏訪)

「ありやもう減俸だね。減俸三カ月」(係長)

「あああああ亜あ亜あ~~~~~!!!」

洵作は頭を抱えて髪の毛を掻き毟ると、

「イイ加減にしろよなっ！」

思いっきり「**BUN!**」と。机に両手を叩き付けると、それと同時に勢いよく立ち上がり、その反動で椅子を後ろにひっくり返し、代わりに「**ガラガツシャン!**」と大きな音を立てた。

「アンタねえ！ 警察署まで連行されて来てんだから、もう少し殊勝な態度でもとつたらどーなのよ。刑事ナメンのも大概にしとけよっ！」

「あら。舐めたらどーなるのかしら？ 真っ赤になつていきりたつとか？」

「オマエに舐められてたつかつ！」

「あら、でももう立つてるじゃない」

洵作は寅雄に言われて、一度自分の姿を見返すと

——くるり反転。背面のマジックミラーに映る、もう一人の自分に向かつて、

「だいたい何で僕がこんなイイ歳して女装なんかしてる変態オヤジの取り調べなんかやんなきゃいけないすか！ どーせみんなそこから見てるんですよ、

もう、ちよつ、誰か他のヒト！ 誰でもいいですから、今すぐコレ代わってくださいよ！」

「——って、んなこと言われてもなア」（羽山）

「しよつ引いて来たのは波多野クンだし」（係長）

「誰が取り調べるかくじ引きしたとき、見事アタリを引いたのはセンパイだし」（遠藤）

「アタリって言うか、ハズレに近いけどな」（羽山）

「アレの取り調べを代われって言われて、ハイ、代わります」なんて変わり者はいないよ」（係長）

「そーつスよねえ。あんなのの取り調べなんていやつスよ」（遠藤）

「俺は泊まり代わってやるからって言われてもイヤだね」（羽山）

「俺も羽山サンに同じ」（遠藤）

「拙者は死んでも御免こうむる」（諏訪）

「減俸三カ月くらいキツイよ、あれは」（係長）

「ん〜……でもさあ、洵作のヤツ。何で奴さんしよつ引いて来たんだ？」（羽山）

「拙者を襲おうとしたからであろう。あ奴が例の事件の犯人だったのじゃ」（諏訪）

「連続婦女暴行事件？」（遠藤）

「でも、ベツに襲おうとしていたようには……見えなかつたけどなア」（羽山）

「だいたい係長命令でしたつスよね。職質掛けろつて」（遠藤）

「判断を急ぎ過ぎたな」（羽山）

「何だよ……それはほら、みんなが不審人物つて言

「うから」(係長)

「? 俺そんなコト言ったか?」(羽山)

「言つたつスよ。羽山サン、アイツのこと何かアヤシイつて」(遠藤)

「俺はアヤシイつて言つただけだろ。不審人物つて言つたのはお前だよ」(羽山)

「いや、だつて絶対領域に『毛』つスよ。本来聖域、不毛地帯であるハズの絶対領域に『毛』が生えてるなんて……絶対不審者じゃないつスか」(遠藤)

「確かに……それは一理あるかも」(係長)

「でもそれだけだろ。具体的にアイツ、何か罪を犯したのか?」(羽山)

「猥褻物陳列罪」(諏訪)

「見えてるのは『毛』だけで?」(遠藤)

「毛なら誰だつて見えてるよ。髪の毛とか」(係長)

「ならば公務執行妨害か?」(諏訪)

「ベツに暴れはしなかつたつスよ。素直に署まで付いて来ましたし」(遠藤)

「じゃあなんであんなヤツ連れて来たのよ」(係長)

「……………さあ?」(羽山・諏訪・遠藤)

——三人はピツタリ同時に首を傾げた。

○アキバ署【刑事課】

「ハア~~~~~。もう疲れた」

溜息と共に口から吐き出された、そんな台詞。^{せりふ}

そして洵作は自分のデスクの上、骨から砕けて崩れるように、そこへ倒れ込んだ。

「取り調べお疲れ様つス、センパイ」

そんな洵作に向けて、元氣よく声を掛けてくる遠藤。

「もうね、ホント疲れた。あの変態メイドオヤジに、今日一日の体力、**ぜえええええんぶ**、吸い取られた気分。今日にも働けない」

洵作は机の上うつ伏せ、スチールの机上に頬を張り付け、自分はそこからもう一步も動けないと、

周囲に誇示する意思表示。

「まあ、今日は俺もクタクタつすよ。結局作戦は空振りに終わったワケだし——」

作戦名『Operation Lockvogel』
オペレーションロックフキゲル

それはこのところ頻発している婦女暴行事件の犯人を捕まえるため、本日アキバ署の刑事課強行犯係五名によって実行された、おとり捜査の名称である。

秋葉原連続婦女暴行事件。

本件がそう呼ばれるようになり、世間を騒がせ始めて早数日。

事件は本日発売の週刊ゲンダイで遂に雑誌デビューを飾り、昨日の犯行はアキバBlogにまで載っていた。そうなると、たとえ今のところはまだケガ人の出ていない事件とは言え、警察も黙ってははいられない。

事件は当初、秋葉原電気街周辺で起きていたことからその名が付き、以後、最近の被害は隣の御茶ノ水や神田辺りにまで広がっている。

被害者はいずれも一〇代後半から二〇代前半の、

若くて髪、の長い女性。

アキバ署やお隣の神田署などでは、これまで巡回の強化や道行く人たち、近隣住民への呼び掛けなどを行い、積極的に防犯活動に努めてきたが、ここに来て被害が増す一方であることを深刻に受け止め、本日遂におとり捜査に踏み切った次第である。

「初日から上手くいくとは思ってなかったけどね。

今日のはさすがに予想の遥かナナメ上を行っていたよ。まさか諏訪ちゃんを餌にあんなヘンタイが引っかけるとは」

「メイドの恰好をしたただのオッサンでしたからね。

事件とは全く無関係な」

「ウチで茶ア飲んで帰っていただけだったよ。

……つたく、だいたい昼間からあんなカッコして街中歩くなつちゅーの。如何わしい」

「センパイ、相手をこずってたつすよね。取り調べしてるのはこつちなのに、逆にスカウトまでされち

「やつて——」

「あ、やつばお前から隣から見てたな」

「えっ……と、アハハハ……」

「遠藤くんは話がマズくなると、笑ってごまかすクセがあるよね」

「まあまあ。誰が取り調べるかは公平にくじ引きで決めたワケなんだし」

「キミね。僕がここぞというときに必ずアタリを引くの知ってて言ってるでしょ。いつも」

洵作にとつてくじ引きとはアンバランス。常に不幸なアタリを呼び寄せる儀式である。

「でもアレ引つ掛けたのはセンパイだったじゃないっすか。だから取り調べもセンパイがやつてちようど良かったんすよ」

「ハア？ その言い方は聞き捨てならないね。それじゃまるで、僕がああヘンタイをよ選り好みして連れて来たみたいじゃないか。アレはもともと係長命令だったでしょ」

「でも係長は、波多野くんもモノ好きだねえ」
つて言つてたつすよ」

「なっ!?……じゃアレ連れて来たの、全部僕のせいってコト?」

「まあ、今日のは自業自得つてことじゃないっすか」

「なんかそれ違うでしょ」

話の展開にいまいち納得のいかない洵作は、机に倒れ伏したまま、横向きの顔を曇らせる。そこへ、「コラ洵作、そんなトコでサボつてンじゃないわよ。仕事ないンならこつちのを回してあげるけど?」

刑事課の入り口から洵作の姿を射貫く視線、聞こえてくる声は男勝りな語り口。タメ口なのは彼女が洵作と警察学校の同期であるためで、課は違つても同じ署に配属されたのは、偏ひとえに二人の腐れ縁のなすワザである——とは彼女の弁。

「あのね、こつちはさつきやつと一仕事終えたトコなの。今ちよつとした息抜き中。そつちこそこんな

トコで油売ってないで、さっさと生活安全課に戻つたら?」

「ふ〜ん、言ってくれるじゃない。でも今仕事ないことに変わりはないんでしょ?」

そう言いつつ「ズカズカ」と刑事課に足を踏み入れて来る水上優紀子(みなかみゆきこ)は、右手に掴んだ少女の身体を、「ズイッ」と洵作の前へと突き出してくる。

「この子、窃盗の現行犯で引つ張って来たんだけど——取り調べ、そっちの方でやっというてくれない? こっちの人手たなくてね、いま全然手エ回らないの」

「は? ちよつ……」

洵作が机から起き上がり、反論を口にしようとする唇を開いたのも束の間、優紀子は少女を刑事課の中に置き去りにすると、ンじゃ後ヨロシク——なんて言い残し、ハヤテのごとく去っていった。少女の身体を押しつけられた洵作は、口元を歪めるだけで何も言えず、去りゆく優紀子の後ろ姿を見送った。

「ハア……で、キミ名前は?」

机から起き上がった洵作は、ナンダカンダガンダーラ(意味不明)ぼやきながら、結局優紀子に押しつけられた少女の相手をしていた。

頭にお団子を二つ載せたヘアスタイル。

際どい位置にまで切り込んだスリットのチャイナドレスは、アニメや漫画で見かける多分に記号化された中国人像——中華なヒトを想起させる。

「ヒトに名前を訊くときは、マズ自分から先に名乗るがヨロシ」

日本語の訛り方も完璧。

「僕の名前は波多野洵作。階級は巡查——つて、何で僕が自己紹介させられてんの?」

「ワタシの名前はモー・タクトー」

「……吐くならもつとマシなウソ吐けよ」

洵作は手にしたペンをカタカタと弄りながら、律

儀にも少女に向かつて突つ込んでいた。

「ならジャッキー・チェン」

「ならつてなんだよ。——つてかさつきよりもメ

ジャーにしてどーすんの。毛沢東は知らなくても、

ジャッキーならそこいらの不良でも知ってるよ」

「仕方ないネ。ワタシこの他に中国人の名前知らないアル」

「ジークンドーの使い手は？」

「ブルース・リー」

「知ってんじゃない」

「！ 自分でも驚いてるアル」

「……でもそれ、全部オトコっスよね」

二人の遣り取りに、隣で耳を傾けていた遠藤が突つ込んできた。

「それは困るアル。ワタシどー見てもオンナの娘ネ。」

銀河美少年じゃなくて銀河美少女ネ。オトコの名前は名乗れないアルヨ」

「さつき思いつきり自分から名乗つてたけどね」

「むうー……じゃあワタシ、こんなときどんな名前を名乗ればいいアルか？」

少女は逆に質問してきた。

「あー……こういう時はね、日本人なら佐藤とか鈴木とかみたいに、とりあえず万能選手のキムさんとか名乗つとけばいいのよ——つて、僕はなに教えてんだ」

洵作は親切だった。

「センパイ、ノリツッコミっスね」

「ウルサイよ遠藤くん」「ハイ、スイマセン」

横から口を挟んではチャチャを入れてくる遠藤を黙らせて、洵作は「**ゴホン!**」と一つ咳払い。

「——で、キミの名前は？」

「ワタシの名前はキム・サムスン」

「……あのね。僕の教えたことを早速応用してくるのはいいけど、それじゃ韓流ドラマだから。もう中国じゃなくなってるよ」

「それ以前に本名じゃないっス、センパイ」

「そうだね—— つてそうだよ！ これはキミの偽名指導じゃないんだから、ちゃんと本名を答えなさい。ほ・ん・みよ・う！」

洵作は真剣な刑事の顔付きで、有無を言わさぬ迫力を發揮して迫ったが、

「……………」

すると少女、今度は黙秘権を発動。くちびるの、

上と下を合わせて——沈黙^{ダンマク}。

「熊沢キヌ……」

そのとき返事は横から返ってきた。

「は？ 何で遠藤くんがそんなコト知ってるの？」

「いや、ほらココに——」

そう言つて遠藤が指さした先には、少女が後ろ手に隠していたハンドバッグ。その片隅に、小学生の持ちモノよろしく名前が刺繡^{ししゅう}されている。

「キミ、熊沢キヌちゃん？」

「……………」

洵作は先ほどより幾分声を和らげて訊いてみたが、

熊沢キヌと思しき少女はウンともスンとも言わない。「ハア……キヌちゃんねえ、キミいつたい何盗^どつたのよ？」

洵作は名前の確認^{あきり}を諦め、話を先に進めることにした。

「ワタシ、ナニも盗つてないアル。スーパーでちよつちバナナをツマミ食いたら、店員が大げさに騒ぎ出しただけネ」

「……キミ、結構大胆な万引きだね」

「どうせ言うなら、セイダイに億引きくらい言つてほしいネ」

ああ言えばこう言う少女のモノ言いに、ドット疲れが増してくる洵作。呆れてその台詞からも覇気がなくなる。

「……あのねえ。キミ、おウチでお父さんとかお母さんから教わらなかつた？ お店のモノを勝手に盗つたりしたらダメだつて」

「そんなのイマドキ小学生でも知ってるネ、ばー

か」

ピシッ——と洵作の手元から、そこに握られていたペンの軋む音。すると同時に堪忍袋の緒もキレたか。

「遠藤くんさあ、もーこの娘送検しちやつていいかな？」

「バナナのツマミ食いでですか？」

「事件に大きいも小さいもないよ」

「センパイ。そのセリフ、使うならもつとカッコイイ場面で使ってください」

洵作&遠藤がチャイナ娘を相手に手こずっている
と、先輩刑事の羽山が刑事課に戻ってきた。

「あ、羽山サン。今までドコ行つてたんスか」

「いや、ちよつとね。——ところでお前ら何やつてんの？」

そのとき羽山の目の前にあったのは、女の子一人を刑事二人が取り囲んでいる状況——場所が場所なら、相手の女の子に如何わしいことをしているよ

うに、見えないこともないような状態。

「あの娘、生活安全課の水土さんが連れて来たんスよ。なんか向こうも忙しいみたいで」

「ああ、さつきそこでアイツが言つてた万引き犯か。本屋で盗んだつていう」

「本屋？」

と怪訝な表情で聞き返す洵作。それはついさつき少女の言つていた話——バナナのツマミ食い——とは、全く以て掠りもしない無関係。

「チッ、バレたか」

「えっ？ なに今の？ バレたか、つてどーいうコトよ。語尾の訛りはドコへ消えたの？ キミそれイキナリ性格変わり過ぎじゃない？」

「センパイ、ツッコミどころはそこつスカ」

「そう、チャイナ萌えは何処へ——つて違ふよ！

そーじゃないつて。……あのねキヌちゃん。キミ、警察にウソ吐いていいとも思つてんの？」

「ワタシ、ムツカシイニホン語ワカラナイアルヨ」

少女は急にカタコトの日本語を話し始めた！

「He that will lie will steal——（フツ）」

「ウソツキはドロボウの始まりネ」

「分かってんじゃない」

「でもセンパイ、彼女はすでにドロボウツスよ」

確かに始まりは過ぎていた。

「細かいことは気にしないの。とっさにコレしか思

いつかなかつたんだから」

「ちよつとそれ見せて——洵作は遠藤にそう言う

と、彼女の持っていたバッグへと手を伸ばす。

「きゃっ！ オマエどこ触てるアルか。このヒトち

かんヨ」

「ハイハイ——キミみたいな小さい娘コなんてね、

誰も相手にしないっての」

洵作は少女の言うことなど相手にもしなかつたが、

「センパイ、ロリコンだったんスカ」

「信じるなよっ！」

「殉職、俺の娘（六歳）に手を出してみる。キサマ

のカラダは蜂はちの巣だからな」

「手なんか出しませんって。あと響きが似てるから

って殉職言うのヤメてください。縁起縁起でもない」

洵作は嫌がる少女の身体からその衣服を剥はぎ取る

と、口から垂涎すいぜん、舐め回すようにその真まつ白な肌を

視姦しがんしていた——

「——つて→コレ？ 地ちの文ぶんまで僕のことをハメ

ようとしてるよ。取とつたのは服じゃなくてバッグだ

からね、バッグ」

洵作は少女から取り上げたバッグの中身を検あつためる。

中からは紙のケースに入った二冊組の本がゴロゴロ

現れた。そのブ厚さは辞書を凌駕するほどで、手に

取るとズシリと重い。まるで鈍器鈍器のような重量感だ。

「キミ、コレは何かかな？」

「本ネ。見て分かれヨ」

「そのくらい分かるよ！ コレはドコから持つてき

たのか、つて意味！」

「怒るなヨ。ちよつとしたジョークじゃないカ」

少女は肩を竦めておどけてみせた。

「コレは著者本人からタダもらってやったアルよ。こんなデカくて重い本、部屋に置く場所ないとか言つてたアル」

「……ウソ臭いな」

洵作は疑り深く、少女を値踏みするような視線でジトリと観察する。

「こつちとしてもいいメイワクね。不良債権押し付けられた気分アル。二冊目は薄くしないと売れないゾってモンク言つといたアル」

「そんなコト言つたら著者に失礼でしょ」

「ワタシはいつでも正直がモットー」

「ついさつき平気でウソ吐いてたよね」

「なんのコトだかさっぱり分からないアル」

ぴゅ~~~~~♪　ぴゅ~~~~~♪　と少女は口笛を吹

いて誤魔化した。その様子からは反省の色などまったく見られない。皆無だ。

「とにかくコレは盗品ちがうアルよ。誤認タイホも

いいとこネ。さつさとワタシ解放するアル」

「……ちよつと待つてろ」

洵作は少女がパクられたという店に電話した。しかし、店員から話を聞いても、万引きの事実は確認されなかった。

「ホラみるネ。ワタシ無罪アルよ。まったく、オトナが他人を信用できないなんて……いつからニッポンはそんな悲しい国になったアルか」

今や少女と洵作の立場は逆転。まるで今の日本を憂うワイドショーのコメンテーターのような発言を繰り出し、あからさまに警察の不手際を糾弾するクレーマーの如き態度だ。

「しかし警察は疑つてなんぼの商売だしなア」

羽山はのんきに言う。

「羽山さん、こんなのまともに相手しなくていいですよ。警察の仕事はガキのおもりなんかじゃないんだから」

最早洵作はまともに取り合う気もなさそうだ。

「なん…だど…？ まともに相手しなくていい——
つて、さてはお前、仕事サボる気アルね。それつて
職務怠慢アルよ」

「あー、ハイハイ。職務怠慢ですな」

洵作は少女を冷たくあしらう。この手の輩は構う
と余計にタイヘンなのだ。

「ま、ベツにいいアルよ。コレでワタシも晴れて無
罪放免ネ。今日のトコロはこのくらいでカンベンし
ていてやんよ」

少女は洵作に向かつてそんな捨て台詞を浴びせる
と、回れ右で刑事課を出て行った。

「とんだお騒がせ娘だったつスね」

「まったく、警察をナメるのも大概にしろつての」

「警察ナメたら汚いアルヨ——とか言いそうだな」

「あ、羽山さんそれ似てるつス」

「だろ。最近ねえ、娘にせがまれてモノマネの練習
をしてるんだよ。例えば——」

チャイナな小生意気、口を開けば憎まれ口を叩い

ていた少女もいなくなつて、談笑の響く刑事課の一
角。そこに再び生活安全課の水上優紀子が現れた。

「ねえ殉職。さっきのチャイナ娘どーした？」

「あのさ水上。気軽に僕のこと殺さないでくれる？」

「ハイハイ……でさ殉職」

「アンタ他人の話全然聞いてないつしよ」

「あのチャイナつ娘は？」

「あの娘ならもう帰したよ。つてゆるかあの娘万引
きなんかしてなかつたじゃん」

「は？ 万引き？ アンタなに言つてんの？ そんな
コトより、あの娘はドコにいんのよ」

「だから一通りお灸据えて、ついさつき家に帰した
んだけど」

「え？ あの娘帰したア!？」

「そーだけど……なんかマズかったの？」

「マズいわよ。あの娘、このおばあちゃんのバッグ
勝手に持つてったんだから」

「は？」

水上刑事に連れられて現れた着物姿のご婦人。彼女は歳の頃の窺える曲がり始めた腰で一礼した後、皺しわを蓄えた口元を開き自己紹介した。

「熊沢キヌです」

——こんなふうに、警視庁秋葉原警察署には、毎日様々な事件が舞い込んでくるのであった、マル。

1 / 2

《3688:19》

—— 翌日。

アキバ署へと出勤して来た洵作は、署内を勢よく走つて来る遠藤と危うくブツかりそうになった。「ちよつ、危ないじゃない遠藤くん。どーしたの、そんなに慌てて」

「事件っすよ、センパイ」

「説明は後ですから、お前も早く支度して来い」

遠藤に続いてやつてきた羽山が洵作に言う。

「わ、分かりました。直ぐ行きますから、玄関で待つててください」

「急ぐのじゃぞ」

三番目にやつて来たのは諏訪巡查部長。いつもはまとめ上げている髪を下ろし、昨日にもまして派手な衣服に身を包んでいる。刑事としては多分にツツコミどころのある服装だったが、洵作はそれを見ても敢えてスルーした。それもきつと作戦の内だ。

「急いでよね。早く来ないと置いていくから」
最後、殿しんがりは係長も、洵作とすれ違いざまに声を掛けていった。

刑事課の部屋は二階。出勤早々洵作は自分の机に鞆かばんを載せると、そのまま回れ右で部屋を飛び出していく。大急ぎで署の玄関まで走つてくると、そこにはパトカーに乗り込む同僚たちの姿があった。

強行犯係のメンバーは二台の車に分乗。洵作は諏訪刑事がハンドルを握る車、その後部座席に滑り込む。前方、助手席には羽山刑事の長身が窮屈そうに詰まっていた。

「とりあえず外神田方面に向かつてくれ」

「了解」

羽山の注文に二つ返事の諏訪。

赤色灯を回転させサイレンを鳴らすと、二台のパトカーは勢いよく署を飛び出して行った。

「いったい朝から何事ですか？」

刑事三人詰めの車内。

パトカーの後部座席から身を乗り出して、洵作は前に座る二人に話し掛けた。

「事件だ。この先の廃ビルでヒトが死んでいるのが見つかった」

「殺しですか?」

「まだわからん。第一発見者の話によると、首を吊って死んでいるということだ」

「自殺か……」

「いや、しかし自殺ではないという話だ。とにかく現場を見てみないことには分からん。——ああ、すわつち。そこ左ね」

羽山がそう言うと、諏訪の運転するパトカーは急ブレーキで減速、車体を傾かせて強引に進行方向を変える。その後ろには、ピツタリと追走してくる遠藤車の姿。

「いやあ、朝からカツ飛ばすねえ。諏訪ちゃん」

「事件あらば、一分一秒でも早く現場に駆けつける

——これ、警察官の職務ゆえ」

「だからって事故なんか起こしたらシャレにならないぞ。そこんとこ注意してくれよな」

「羽山先輩は拙者の運転を少々見縊られているようじゃな」

そう言うと諏訪は accelerator ——ペダルを一気に踏み込んでエンジンを吹かす。

「おわっ!」

急激な加速の反動で身体が揺さぶられる。洵作は座席に叩き付けられ短く呻き声を上げた。

ボンッ!
飛び上がる車体

諏訪の運転するパトカーは重力を振り切り、坂の上から軽く中空をジャンプする。

「なに今、この車飛んだすよ。羽山さん」

「ああ、だから安全運転しろって言ったんだ」

「大丈夫じゃ。此処で飛ぶのも計算の内。シートベルトをしておれば問題ない」

「あ、今度はそこを右にま——」

「うおっ！」

再びおもいつきりハンドルを切る諏訪ドライバー。

後輪を「ギヤリギヤリ」と横滑りさせながら交差点を右折する。そんなレース仕様のドリフトコーナリングは、サイレンを鳴らしているとはいえ、公道で、しかも通勤ラッシュの時間帯にやる運転ではない。多少道が空いていたからいいようなもの、一歩間違えればあわや大惨事となるところだった。

キキキイイイイイイイイイ!!!

最後、急ブレーキで急停車したパトカーの眼前には、長引く不況により朽ち果てた廃屋が建っていた。新築時の栄華など見る影もなくなったバブル負の遺産。土と灰に塗れた鉄筋コンクリートは、そのまま真夏の怪談じみた佇まいだ。

BUN! ☆BUN! ☆BUN!——と三つドアを閉める音。

車から廃屋前に降り立った三人の刑事は、その亡霊のような建物を見上げて立ち止まる。

ちょうどそのとき、晴天の空を流れてきた雲が陽光を遮り、辺りが一瞬暗く染まった。同時に黒い不吉な影が、物陰から一斉に羽撃き、宙を舞う。漆黒の鴉の群れが飛び立つ。

人心の不安を煽る
不気味な音が周囲に木霊する……

これが日没間近だったならば——それは死神の哄笑に聞こえたかもしれない。

「行くぞ」

そんな得体の知れない不安を払拭するよう、羽山は先輩刑事らしく洵作の肩を叩いて、
「いや、行くんでしょ。羽山さん」

DON!と前に押し出した。

「ああ、行くよ。でもね、ココはまだ新米刑事のキ

ミが経験を積めるように、道を譲ってあげようじゃないか」

「……羽山さん、怖いんすか？」

「ナニを言ってるのだね、波多野巡查。——いいか、刑事には決して信じてはいけないものが三つある」

「そう言うと、羽山は徐おもむろに右手を挙げ、三本の指を突き立てた。

「まず一つ目——犯人のアリバイ」

「確かに、アリバイがあつたら犯人じゃないですもんね」

「つい口を衝ついて出た洵作のツツコミに、羽山は一瞬顔を顰しかめたが、次の瞬間には二本の指で2を示す。

「二つ目、副署長の自慢話」

「あれウソ臭いですよねえ……つてええっ！ ホントにウソなんですか？」

「そして三つ目が——ズバリ、超常現象」

羽山は大げさに目を見開くと、洵作の肩を押さえ

て顔を近づける。

「いいか。刑事が超常現象なんか信じちゃいけない。幽霊亡霊お化けの類はもちろんのこと、妖怪とか呪いとか霊能力とか——そういうのは一切信じてはいけない。呪いでヒトが死ぬか？ 幽霊にヒトが殺せるか？ ——答えは否。断じて否だ。現実には確固たる物理法則によつて成り立ち、死んだニンゲンが化けて出ることも、誰かの恨うらみみ辛つらみでヒトが死ぬこともない。この世に科学で証明できないことなどナニ一つないのだ」

「だつたら何で羽山さんは、さつきから僕の肩を押して先に行かせようとしてるんすか？」

「だから、それはさつきも言つただろ。まだ刑事に成り立てで経験の浅いキミに、事件の現場というものを肌で感じて学んでもらうため——」

「拙者は先に行くぞ」

諏訪は波多野羽山両刑事の押し問答を尻目に、スタスタと現場の廃ビル、その玄関へと向かつて歩い

て行く。

「ああ、諏訪ちゃん待つて。僕も行くから」

諏訪の後ろに洵作が続き、

「コラ、キミたち。先輩を置いて先に行くとはナニゴトか」

置いてけ堀を喰らいそうになった羽山が、慌てて二人の後を追う。三人は諏訪を先頭に縦隊一列、事件現場の廃ビルへと入って行った。

三刑事^{テカ}が煤汚れたガラスの向こう、単なる引き戸に成り下がった自動ドアを潜ったところで、もう一台のパトカーが遅れ馳せながら現場に駆け付けた。停車した車、その運転席で、付いてくるのがやつとだった速藤^{ドクズ}の呟きが口から漏れる。

「すわつち運転速すぎ」

…

「通報によると、首を吊った死体は三階にあったそ

うだ」

薄暗い廃ビルの中、合流したアキバ署刑事課強行犯係御一行は、小学生の肝試しツアーのように、廊下を一塊^{ひとかたまり}になつて歩いていった。

靴底で踏む床の上には、剝げ落ちた壁紙や砕けた硝子^{ガラス}、崩れた天井の一部などまで散乱している。

「三階って言ったら全然上じゃないですか。まずは階段を見つけないと」

洵作はキョロキョロ辺りを見回し、近くに階段が無いかどうか探している。

「エレベーターで上がればいいんじゃないか？ ホラ、すぐそこにあるぞ」

「あのね羽山さん。こんな潰れたビルのエレベーターが動くワケないじゃないですか」

「バカ殉職。よく見てみる。階数表示のランプが点灯しているだろ」

「あ、ホントだ」

「三階が光ってるっすよ。——あ、降りて来る」

…

「いったいヒトのことを何だと思つたのじゃ」

エレベーターの中から降りて来たのは、竹箒たけぼうしを

右手に、首にタオルを巻いた清掃ルックの老人——

田中甚兵衛たなかじんべえ（六六歳）。警察に事件を通報した第一

発見者だつた。

「くさつたしたい？」（洵作）

「リビングデッド？」（羽山）

「しりょうのきしじやないっすか？」（遠藤）

「……警察は年寄りを敬うということを知らんのか」

「いえいえ、決してそのようなことは……ただ最近

は急増する凶悪犯罪の下で、刑事たちの心も少々荒

んでおりまして——」

係長が揉み手でご老人に釈明する中、一行はエレ

ベーターに乗って三階まで昇つた。

「ご老人、死体の方はどちらに？」

諏訪が田中甚兵衛（身長一六三センチ）に訊ねる

と、老人はその顔を見て、一瞬、目をパチクリとさせ、

「こつちじゃ、付いて来い」と先頭に立つて歩き出した。

それまで小学生の“肝試し体験コース”のようだった一行は、田中甚兵衛（柔道黒帯）を仲間に加えるとレールアップ、少々強気な中学生たちの“廢墟見学ツアー”のようになった。

「ときに其の方、かなりの別嬪べっぴんさんじゃの」

田中翁は隣を歩く諏訪刑事に向かつて、囁ささやくように

にそう言つた。

「いや、拙者は——」

「そうでしよそうでしよ。この髪型ねえ、よく似合つてるでしよ」

諏訪が田中翁の台詞に言葉を返そうとした矢先、

背後から羽山が合の手を入れるように会話に割り込んで来た。

「そうじゃのお……初め口を利いたときには、儂むも

びつくりしたが」

「そーなんですよ。コイツね、実家が日光江戸村でして、幼いころからこういう喋り方なんですよ。ええもう、初めて聞くときはびつくりするでしょう」

「いつのまに拙者の実家は日光江戸村になったのじや……」

羽山は隣でばやく諏訪を無視して、その後も田中翁に向かって畳み掛けるように喋り掛け、相手に一言も、諏訪にも一言も喋らせないまま喋り倒し、会話を終わらせてしまった。

「羽山先輩、一体どういうつもりなんじゃ。コレではまるで拙者が——」

「何を言ってるんだ、諏訪巡査部長。これも捜査の一環だろう」

「しかし今は別の事件……そもそも、何故今日も拙者はこんな恰好しておらねばならんのじゃ」

ヒールにミニスカートを。それから普段は後ろで一房に縛り上げている黒髪——今は下ろしてストレー

トな長髪——を示して、諏訪は羽山に抗議する。

「いいか、諏訪巡査部長。敵を欺くにはまず味方から。犯人を逮捕するその日その時その瞬間まで、キミは完全に犯人の標的と成り得る女性像で在らねばならない。キミは昨日、何故作戦が失敗したか分かるか？ それはまたキミが完璧な囷——犯人が標的とする、その欲望を抑えきれないような、そんな女性を体現出来ていなかったからだ。一日も早く、一刻も早く！ 連続婦女暴行犯を捕まえるためにも！ 諏訪君！ キミは犯人がその姿を目にした瞬間、もうその場で襲い掛からずにはいられないような、そんなオンナにならなければならない！」

羽山は歩きながら、なおも諏訪の耳元へ向けて熱く囁き掛ける。

「そのためには普段から、キミは平素からその恰好で、完璧な囷としての立ち居振る舞いを身に付けなければならぬのだ」

「——俄には納得しがたいが……先輩のご命令と

あらば、従うより他にないか」

腑に落ちない表情でも、諏訪はそう口にする。

「そうか、分かってくれたか。諏訪君！」

すると羽山、口の端を吊り上げるシニカルな笑みを浮かべ、何か喜びを分かち合うように両手で相手の手を握る——

「何やってるんすか？ 羽山さん。もう現場着きましたよ」

羽山が諏訪だと思つて握り締めたその手は、波多野洵作のモノだった。

田中甚兵衛（握力五〇キロ）が一同を連れてきた場所は、部屋の中央に鉄製のロッカーが一つあるだけの、他には何も無い、ガランドウの部屋だった。

その部屋の広さは、学校の教室一つ分ほど。

教室そごから机と椅子を全て運び出してしまえば、ちよど今彼らの目の前に広がっているような空間が開けるだろう。

中央に鎮座した鉄の匣はこ。

匣と言えば魍魎の匣。

昨今携帯電話の普及で、街中からめつきり姿を消した電話BOX。その種類の中でも、最も細身で、ヒト一人がようや漸く中に入れるくらいのスペースがあるだけのモノ。

そんな講談社BOXならぬ電話BOXのような鉄匣が一つ、その部屋の中にたった一つだけのオブリエとして聳え立ち、そこに訪れた者たちの視線を一身に集めている。

「ココじゃ」

そう言つた田中翁の言葉は、必然的にその匣の中心が何であるかを物語つていた。

「あの……ハコの、中に……」

本田四朗強行犯係係長は、震える声で言つた。

「お、お前……ちよつと行つて確認して来いよ」

「羽山さんの方こそ、刑事がビビってどーするんですか」

「しかしな、お前はそう言うがな、例えばだな、あの箱の扉を開けたときにだな、こう、イキナリ、ホトケさんの身体が倒れ掛かってくるようなことがあったりしたらだな」

羽山は恐ろしさのあまり混乱している。

「羽山君。キミ、行つてきなさい」

いつまでも言い訳を口にし続ける羽山に、

「な、何で俺が……」

「これは係長命令です」

警察縦社会の階級権力が羽山の身に襲い掛かる。

しかし、

「殉職、お前行つてこい」

「え、どーして僕が？」

「先輩命令だ」

羽山は即座に強権発動！ 洵作の口を命令の二文

字で強引に封じてしまう。

「遠藤くん」

「なんスカ、センパイ」

「キミ、今度合コン連れてつてあげるから」

「マジっスか……いや、でもなあ」

「交通課のなっちゃんも——」

「行つて参ります」

遠藤は洵作に向かって敬礼。

「アンタらなにやつとんのよ。サツサと中の死体確認してこんかい」

一同は田中翁に責付かれ、結局全員一蓮托生、運命共同体にて鉄匠の前に並んで立った。

「……最初はグー、じゃんけん——」

そのときアキバ署強行犯係の面々は、突如ぐるりと輪になって円陣を組み、頭に？ハテナいぶか訝しむ視線でそれを眺める田中翁を尻目に、彼らは鬼気迫る形相でグーの手を握る。

第一回、誰が匣の扉を開けるのか選手権じゃんけん大会。栄えある勝者は波多野洵作巡査に決定いたしました——

——それは宛ら棺だった。

四角い、直方体に区切られた空間。

その中に、歪に詰め込まれた、ヒトのカラダ。

死人を納めた鉄の匣は、中の屍と同様、冷酷な死の象徴だった。

匣の天井よりぶら下がった縄の先には、表情を失ったニンゲンの末路がある。

名も知れぬ亡骸は傷だらけの衣服を纏い、死せる腐臭を漂わせていた。

歪な頭部、

血で汚れた身体、

見るも無残な手足……

誰からも弔われることのなかった、朽ち果てた魂の抜け殻。

それは見る者の恐怖を喚起する、絶対的な負の感情——絶望。

生きとし生けるモノが避けるコトのできない、決して逃れるコトなどできない、死という結末。

しかし——

その時見せつけられた終わりは、あまりにも無慈悲で、そして……残酷だった。

